

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学紀要(一般教育) (2012.03) 28号:77~79.

40年の物語

中村正雄

Ann. Rep.

Asahikawa Med. Univ.

Vol.28, 2012

## 40年の物語 A memoir of my past forty years

中村正雄

Masao Nakamura

---

北大の付属研究所で大学院の生活をスタートした。研究室の選択は4年生の卒業研究分属時で、思い起こすと大航海時代の船乗りが船長を選び自分の航海を託す姿に似ている。スタッフは教授、助教授、助手2名、技術職員1名、事務官1名、それに大学院と学部生を入れて10名で合計20人ほどであった。研究室全員で春先に、西洋ワサビからの酵素の精製がスタートする。道内に自生し、収穫された西洋ワサビを破碎し、ミキサーにかけ、ろ過とクロマトグラフィーで純度の高い標品を手に入れ実験をする。精製が始まると、部屋にひどい臭気が立ち込め、4月の寒さの中、窓を開け放ち作業する。2ヶ月ほどの一連の作業で、タンパク質の精製法を私たちは身に付ける。この後、各自のテーマに必要な実験材料を調製する。私は屠場や農場から動物の臓器や牛乳を手に入れ、酵素やタンパク質を調製した。実験で扱った酸化還元酵素は補欠分子族や補酵素を持ち、精製が進むと美しい色や蛍光を示す。当時、生化学共通講義が全学の院生を対象に開始していたが、分子生物学は整備されていなかった。大学院の指導は、自学が基本で、手取り足通りの細かな指導は少なかった。時代精神は「彼は私に教えようとしなかった、だから私は彼から学ぼうとした。」であった。私たちの情報源は文献が主で学会の討論や留学した先輩の経験談が励みであった。図書館に足を運び、主要な専門誌を読んで、メモをとった。複写にゼロックスが登場したのは驚きであった。現在は、専門誌が当時に比べはるかに増えている。研究に関連した専門領域を把握するだけでも大変である。後で気が付いたことだが、私が選んだ研究室はフリーラジカルの研究では知識、技術の点で最適であった。恩師の山崎教授は、戦後の生化学の研究分野で、独力で新しい領域を開いた開拓者の一人であった。退職後も、外国で研究生活を続ける先駆者であった。当時、大学院を終えて留学することが研究者となる通過儀礼であった。思い返すと、興味深い研究テーマに出会うことが何より大切である。学位をとった1970年代、化学分野はそろそろ留学先の研究費が不足がちであったが、生化学を含めた生命科学分野は潤沢であった。生化学会が私の主な活動舞台であった。学会では筋収縮や酸化還元

---

旭川医科大学医学部化学教室 email:nmasao@asahikawa-med.ac.jp

酵素の分野が活発で、若い研究者が自由な討論をしていた。優れた業績を上げるには自由なアイデアが必須な条件である。またどんなすぐれたアイデアも、実験で確認されなければ評価されない。生化学に分子生物学の手法がとり入れられ、大きな潮流となっていた。大学院では一人が一つの酵素やタンパク質を精製し、研究対象としていた。当然その研究対象で成果が決まることがある。アメリカの研究者が市販の酵素を多量に買い研究成果を上げており、羨ましく思った。留学はすでに玉石混交の時代で、帰国しても研究職に就くことは次第に困難になりつつあった。学位の取得後、就職担当の教授にあいさつに行くと、同期で学位取得したのは6名であるが、就職がきまっていたのは1人もいなかった。新設医大の開学もすでに終了していた。創設まもない、日本版ポスドクである学術振興会の特別研究員を経て助手に採用された。指導をうけていた助手の方が留学して帰国後、筑波大に転出した後任であった。このころ学位のレベル保持に役立っていた内規がくずれ、産業界の要請の名目で学位取得者が増化していった。研究職の職が限定されているというのに。80年代の半ばにアメリカ東部に留学した福岡伸一氏が、当時の留学生生活を述べており、これを懐かしく読む事ができた。私は日本人のいない研究室、好きな音楽も聞けそうなところを選んだ。雑用のない研究室は、何事にも集中でき居心地がよかった。日本のトップレベルの研究室で、修士卒の知識と実験技術を習得していれば世界の研究室で充分生きていけると思った。

留学先で一緒にポスドクを経験したことで、私は良い友人に出会えた。Rは当時30代半ばのイタリア系のニュー Yorker。祖父はインドで印刷業を経営していた。Rは高校生のとき音楽の道を志したが、ピアノの試験で酷い試験官に出会う。その足で化学の試験を受け、コロンビア大で学位をとる。ブロンクスにあった研究室で共に学んでいた頃、Rには外科のインターンをしている奥さんがいたが多忙で、食事に招かれても、彼が食事を作っていた。数年後離婚し、その後、彼の研究室に留学していたイタリアの女性と再婚、念願の娘が誕生したことを便りで知った。2009年春、ノースカロライナ州のチャペルヒルで学会があり、会場でRの研究室で研究員をしていたLと会う。彼女は東欧で学位をとったが職がなく、生物学を専攻していた主人と共にドイツで研究職を得る。しかし契約期間が終わり、ネットで次の研究職をもとめ、Rのラボの研究職をえた。その時、彼はオーストラリアで職を得ることを、Lは離婚して子供を引き取ることを選んだと言う。アメリカは世界中から有能な人材を集め国力の源にしている。Rは私達と一緒に研究室から、ニューヨーク市立大のブルックリン校に勤務していた。そこで大きな研究費を得て、現在有力な生化学誌の編集委員をしている。日本人研究者の研究能力に高い評価をし、ヤンキースにいた松井を賞賛していた。チャペルヒルの学会から日本への帰路の途中、ニューヨークでRと30年ぶりにゆっくり話げできた。Rの父は海兵隊で太平洋戦争に従軍し沖縄戦、朝鮮戦争を戦い負傷した。9.11テロの時、スタッテンアイランドの自宅から勤務先のブルックリン大学へ向かう途中であった。そこで、世界貿易センタービルに飛行機が衝突するのを目撃する。彼の娘友達の消防士で

ある父親達が殉職している。もう一人の友人はMである。生まれて100日足らずの息子と3人の留学生活がスタートした。大学の用意してくれたアパートが空いておらず、2ベッドルームでイタリア女性Mとの共同生活が始まった。彼女のボスが私のボスと知り合いであることですぐに打ち解けた。また、知り合いもなくホームシックになりかけていたMは赤ん坊をあやすことで気がまぎれた。我が家にも幸いであった。6月の卒業式が終わり、ニューヨークに夏が訪れた。学生達は思い思いの旅行や計画を話し合っていた。1週間の休みにも慣れていないわたしは休暇の予定もなかった。休暇が近づくと、Mの顔に生氣が戻ってきた。彼女はバカンスを毎年、南イタリアの生家で一ヶ月過ごす。いやその為に日常を詰めて過ごす。その後、私は1995年に学術振興会の特定国派遣研究者に採用され、Mの家族と義父の住むルッカに近い町で週末を過ごすことができた。義父を中心にした食卓で、庭で飼っていたにわとりや野菜料理でもてなされた。懐かしい日本の風景とよく似ていた。私たちの宿があったカマヨーリの町は教会を中心にした、こぎれいな街である。美しい海岸線に山が迫り、私たちは昼食をとるため山道に車を止め、トラットリアに向かった。食後友人の娘達と一緒に山頂まで歩いた。明るい広場に出ると、そこに記念碑が建てられていた。第二次大戦中占領していたドイツ軍に蜂起したパルチザンの犠牲者のためであった。一人のドイツ兵の死に対し、ドイツ軍は多数のイタリア人の処刑で報復したという。この海岸線は避暑地としても有名である。北ヨーロッパからドイツ人を含め多数の観光客がここを訪れる。何事もなかったように、この街は懐かしい家並みと心地よい人達を抱いている。昨年夏、Mに連絡を取ったが、いつになく返事が緊迫感を帯びていた。ローマ大学の友人達は、ベルルスコーニ政権の提示した大学の改革案に反対してスト中であった。経済危機と政変を幾たびも経験しながら、日常に、心地よさを効率に優先させた暮らしぶりがなんともたくましく思えた。

紀要への寄稿を勧めていただき、忘れかけた懐かしい記憶を思い起こすことになりました。編集者に感謝いたします。

なかむらまさお (旭川医科大学医学部化学教室)